

維新史回廊だより



第27号
2017年
3月発行
年2回発行

■編集 維新史回廊構想推進協議会
■発行 山口県観光スポーツ文化振興課
(山口市滝町一丁目 TEL 〇八三一九三三二二六七)

維新史回廊だより第二十七号をお届けします。今年は、押し明治維新一五〇年です。明治維新実現に活躍した人の一人が高杉晋作ですが、彼の精神の拠りどころには、何があったのでしょうか。下関市立中央図書館の安富 静夫館長に紹介していただきました。

師吉田松陰の”読書の教え”と”志”を継ぐ



高杉晋作
(東行庵蔵)

はじめに

高杉晋作の師は、吉田松陰です。吉田松陰は、松下村塾で読書がなにより大切であることを教えていました。加えて、天下の事を成すに

は、志を同じくする士と、その志を通じなければ実現できないと、遺言しています。

Q 吉田松陰は、何冊の本を読んだのでしょうか？

高杉晋作は、松下村塾で師・吉田松陰(1830-1859年)から、読書の大切さを学びました。では、師・吉田松陰の読書量はどれほどのものだったのでしょうか。

吉田松陰は、1854年(安政元年)下田渡海するとき、江戸からやがて萩に帰り、10月24日、野山獄に入りました。出獄までに1年2ヶ月を要しましたが、その間に618冊を読み、さらに、読書は継続し、約3年間に合計1460余冊を数え、「野山獄讀書記」(吉田松陰全集)(9巻)に全てを記録しています。

内容の一部は、次のとおりです。

甲寅十月念四日入獄

一、蒙求三冊

一、延喜式五十冊 十一月十七日卒業 二十七日返したる

一、史徴八冊 卒業 返す

※「念」は二十で二十四日入獄。「卒業」は、読み終わったことを示しています。数行進むと、

一、坤輿図識三冊、新製輿地全図壹軸 十一月二十二日

と、世界地図まで読んでいます。以後、3年間、記録は続いています。

吉田松陰の読書の原点は、松陰の父・杉百合之助にありました。杉百合之助は礼に厚く、勤儉の読書家で、農事のかたわら(あいざわせいさい)会沢正志斎の

「新論」や頼山陽の「楠公墓下詩」などを愛読し、松陰に対し、「話す暇があるなら本を読め」と、常々教育していました。

吉田松陰は、その後、志士たちのバイブル“とも言われた「新論」の影響を受けています。

Q 吉田松陰はどのようにして、読書の大切さを教えたのでしょうか？

松下村塾には、床柱に相当する聯(孟宗竹に漢詩が刻まれています)があります。その聯の文字は、吉田松陰が書き、久保五郎左衛門が彫ったもので、たて2行の記述内容は次のとおりです。

自非読萬卷書 寧得為千秋人

(解説：萬卷の書を読むに非らざるよりは、いずくんぞ千秋の人たるを得ん)

自非輕一己勞 寧得致兆民安

(解説：一己の勞を軽んずるにあらざるよりは、いずくんぞ兆民の安きを致すを得ん)

※言葉の意味は、多くの書物を読まないと、後世に名を残す人にはなれない。

※自分ひとりの勞力を惜しむようでは 多くの人を幸せにすることはできない。

というものです。松下村塾の塾生は、この聯を日々眼前にし、読書の大切さを、教えられたことがわかります。



松下村塾の聯

Q 吉田松陰は、“志”の大切さを、どのようにして教えたのでしょうか？

吉田松陰は、安政6年(1859)10月、処刑されることが分ると、伝馬町の獄で塾生への遺言「留魂録：りゅうこんろく」を、25日から書き始め、26日の黄昏までに同じものを2通、書きつつつていきます。(タテ12行、ヨコ17行の半紙19面に、合計5000文字)

表紙には

「身八たとひ武蔵の野辺に朽ぬとも留置まし大和魂

十月念五日 二十一回猛士」

と記されています。

全16章でつづる第13章には

「天下ノ事ヲ成スハ天下有志ノ士ト志ヲ通スルニ非レバ得ス」

とあります。

これは、高杉晋作が文久3年(1863)6月7日、奇兵隊結成に際し藩に提出した「奇兵隊隊法上申書」に、隊構成の重点を武士階級におくものの、「陪臣・輕卒・藩士を撰ばず、同様に相交り」とあるように、武士階級内部の封建的身分差別にかかわらず、もっぱら個人の「力量を貴ぶ」こととし、かつ武士階級に限らず“志”があれば入隊を許すとした点に表れています。

Q 吉田松陰は、「留魂録」を2通作成していました。なぜでしょうか？

万一、1通では門下生に渡らなかつたことを考えてのことです。

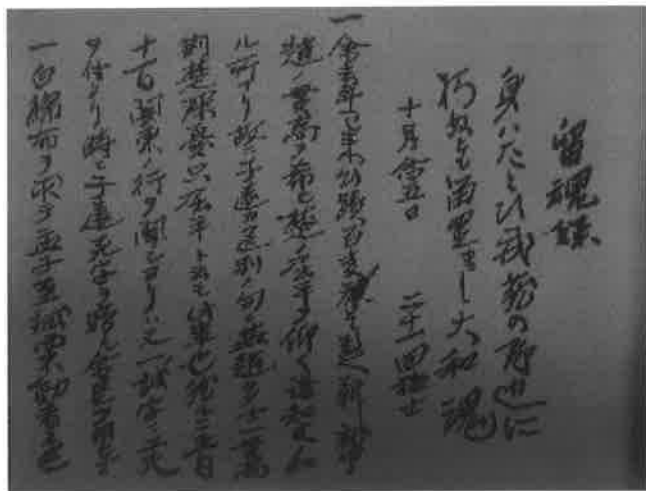
確かに1通は、江戸にいた門下生の飯田正伯を経て、萩の高杉晋作などへ渡りましたが、転々と書き写しているうちに、その行方がわからなくなっていました。

もう1通が萩に届くのは、17年間を経た明治9年(1876)のことでした。伝馬町の牢で沼崎吉五郎(殺人で入牢、しかし吉田松陰

を尊敬していました)へ所持を依頼したものでした。

沼崎は三宅島へ流されたのち、明治7年に許されて東京へ戻り、明治9年に、神奈川県令をしていた野村靖を探し当て、黄色に汚れた紙切れを渡しました。それが、17年間大切に保管してきた、もう一通の「留魂録」でした。

現在、萩松陰神社の「至誠館」(留魂の間)で大切に保存されています。



留魂録 (松陰神社至誠館)

Q 高杉晋作の読書の成果は、どのようなものだったのでしょうか？

高杉晋作は、万延元年(1860)、22歳のとき、「試撃行」という旅で、江戸から信州・福井を廻わり、笠間の加藤有隣・信州の佐久間象山・越前の横井小楠などと面談しています。

特に、佐久間象山とは9月21日、夜を徹して語ったといわれています。この旅を終え萩に帰り着くと、11月19日付けで、江戸にいる久坂玄瑞に、「これから3年間、家に引きこもって、本が読みたい」という手紙を出し、「その策があったら、教えて欲しい」とさえ記しています。しかし、奇兵隊の結成と小倉戦争(幕長戦争)が、その時を与えてくれませんでした。

・奇兵隊士も読書で学ぶ。

「奇兵隊日記」には、元治元年(1864)四月十五日「夜、読書休止之事」四月十七日「於壇之浦(長徳寺)二七之日、新論講釈相始候事」、四月十九日「読書掛り相定候間、御承知可被成候」四月廿日「隔夜ニシテ文章規範講会相始候事」六月十三日「文学会の稽古日」。

一ノ四朝「修書会」、二七朝 新論考、四九ノ夕新論講 二五八夜輪読。右之通被相改候間、御承知可被成候、以上。

慶応元年(1865)四月二十五日 諸稽古規則 「朝六ツより五時迄、読書」「夕七ツ時より六時迄、右読書」。昼間は、剣槍、銃陣、野戦砲稽古、などあります。

このことから、奇兵隊士が読書を基本に、いかに学んだかがわかります。

・小倉戦争(幕長戦争)の戦利品で本を持ち帰る。

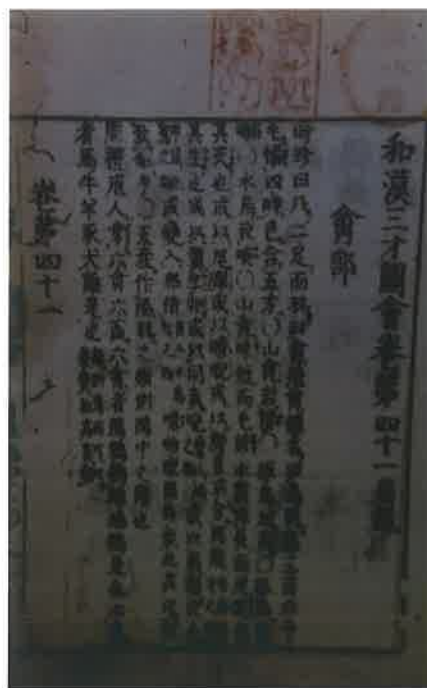
奇兵隊は、慶応2年(1866)8月1日、小倉藩が小倉城に自ら火をつけたのち、香春(直方)へと撤退したあと、三の丸にあった藩校・思永館(現在・西小倉小学校の地)から、書籍を持ち帰り、奇兵隊の蔵書としています。

「白石正一郎日記」には(八月八日)過二日小倉渡海の節書物二十箱程軸物五ふく分捕致候由と記述されています。

思永館から持ち帰った書籍の種類は、代表されるものとして1713年から30年以上を要して出版された日本最初の絵図入り百科事典『和漢三才図會』(全105巻、81冊)木版。編者は寺島良安(大坂)・医師)※三才とは、天(天候・暦日など)、地(山水・植物・鉱物など)、人(人間・生物など)です。

そのほか『国史餘論』『五代史』『唐史』『伝家法』『經典釈文』など貴重な本ばかりです。これらの本は、現在、山口県立山口図書館・山口大学の図書館に約400冊を数えます。

書物の上方空白には、小倉藩の藩校「思永館」という円形の所蔵印があり、その左に、正方形の「奇兵隊印」の所蔵印が、押されています。



所蔵印が押された「思永館本」

これは、奇兵隊士が個人の蔵書にすることなく、すべて奇兵隊の蔵書とした証です。みんなで学ぼうとしたなによりの証左です。当時、奇兵隊の本陣は吉田（現・下関市吉田町）に置かれ、図書室まで設けられていたそうです。奇兵隊士はこの思永館本などの蔵書で、朝・夕2時間、学習をしていたのです。

・高杉晋作自身は、生涯約370編の漢詩をつくる。

高杉晋作自身も松下村塾で学び、佐久間象山に会ってさらに衝撃を受けたことから、多くの本を読み、27年8カ月という短い生涯ながら、約370篇もの漢詩を詠み、『東行詩集』（発行 東行庵）として、遺されています。

その一篇 題焦心録（焦心録に題す）

内憂外患迫吾州（内憂外患我州に迫る）

正是邦家存亡秋（正に是れ邦家存亡の秋）
将立回天回運策（将に回天回運の策を立てんとす）
捨親捨子亦何悲（親を捨て子を捨つる亦何ぞ悲しまん）

この詩は、長府功山寺で拳兵のときの作で、国のために尽くすのに、親を捨て、子を捨てることなど、悲しいことではない、と詠み、その決意のほどを示しています。

おわりに

高杉晋作の業績は、奇兵隊の創設、四か国連合艦隊との折衝、功山寺決起、幕長戦争での勝利などがあげられますが、その偉業を実現できたのは、読書に裏付けされた思考力と、志を同一にするメンバーの行動があつてのことでした。

明治維新150年を迎えるにあたって、現代人の我々は、先人の近代社会実現に邁進した行動力に、あらためて敬意を表すとともに、手軽に取り組める読書に寸刻でも時間をさき、次の時代の進展に尽くすではありませんか。

〈参考文献〉

- 『高杉晋作』 1977年 奈良本辰也
- 『奇兵隊日記』 1967年 日本史籍協会
- 『吉田松陰全集』 1972年 山口県教育会
- 『吉田松陰』 1990年 山口県立山口博物館
- 『白石家文書』 1968年 下関市教育委員会
- 『東行詩集』 1973年 中原雅夫

維新史回廊だよりは、県内各市町の文化振興担当課や博物館・資料館、県政資料館に置いています。既刊号は、維新史回廊ホームページ（維新史回廊だより）で検索して御覧いただけます。次号は、今年九月発行の予定です。どうぞ御期待ください。